

登山月報

JMSCA

登山月報 第672号 令和7年3月15日発行



『鈴鹿山系 鎌ヶ岳』撮影：(一社)三重県山岳・SC連盟 自然保護委員長 水谷のりや



No.672

ボルダージャパンカップ2025 (BJC2025) 開催報告	2
速報 2025 アジア冬季競技大会 SKIMO 競技	4
鳥取県大山 令和6年度 氷雪技術研修会、コーチ2 養成講習会報告 ..	5
2024年度山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区) 報告	6
2024年度 AvSAR 上級講習会 報告	7
Enjoy Climbing	8
東京都山岳連盟自然保護委員会のSDG s な活動	9
2024 自然保護指導員研修会および公開講演会報告	10
寄贈図書	10
令和6年度 全国理事長会議報告	11
JMSCA、表紙のことば	13

ボルダージャパンカップ2025 (BJC2025) 開催報告



ボルダー種目の日本一を決める「ボルダージャパンカップ2025 (BJC2025)」が、2年ぶりに東京・駒沢オリンピック公園総合運動場で開催。記念すべき第20回大会となり、決勝チケットは完売。多くの観客が詰めかけ、熱気に包まれた。

【開催概要】

ボルダージャパンカップ2025 (BJC2025)

期 日：2025年2月1日(土)～2日(日)

会 場：駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場

参加選手数：男子52名、女子53名

※SCJT2024 JMSCA 優先出場選手(ボルダー) および
SCJT2024 ボルダーランキング上位者

来場者数：予選 約1,000名、準決勝 約1,100名、

決勝 約1,200名

※招待者等を含む ※決勝チケットは完売

【概況】

今回は20回目の記念大会であり、さらにパリオリンピック直後という特別なタイミング。より多くの観客が訪れやすい会場として、なじみ深い「駒沢オリンピック公園総合運動場 屋内球技場」を選定した。

本大会では、より充実した大会環境の整備と運営資

予選の様子



金の確保を目的に、チケット価格を改定。企画段階では販売状況を懸念する声もあったが、販売開始からわずか数日で決勝チケットが完売する結果となった。このことから、BJCへの関心の高さ、そしてスポーツライミングの社会的な認知度が着実に向上していることを改めて実感した。

【競技】

結果＜男子＞

順位	氏名	所属	成績(決勝)
1	安楽 宙斗	JSOL	84 pt
2	藤脇 祐二	大阪府山岳連盟	69.1 pt
3	杉本 怜	北海道山岳・スポーツライミング連盟	59.9 pt

結果＜女子＞

順位	氏名	所属	成績(決勝)
1	野中 生萌	無所属	84.8 pt
2	関川 愛音	八戸学院光星高等学校	84.6 pt
3	中村 真緒	日新火災	84.5 pt



Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ



Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ



Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ



Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ



女子入賞選手

Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ



男子入賞選手

Photo - Ryo Kubota/JMSCA/アフロ

年初に国際スポーツクライミング連盟(IFSC)の競技規則が改定されたことに伴い、本大会も新たな国内競技規則のもとで実施された。主な変更点は以下の通り。

- ・**成績** これまでの「完登数・ゾーン獲得数」から、それらをもとにポイントが付与される「ポイント制」に移行。
- ・**決勝進出者** 決勝進出者が従来の6名から8名に増加。
- ・**決勝方式** 2名が同時に競技を行う形式へ変更。

この新ルールは、昨年のパリオリンピックで採用されたボルダー&リード種目のボルダー部分をベースにしており、競技の大きな方向性は変わらないものの、観客にとって分かりやすく、盛り上がりやすい形式へと進化した。

男子決勝は予選、準決勝で全課題を完登した安樂が決勝でも圧倒的な強さを見せつけ3課題を完登、オリンピック・メダリストとして圧巻の1位を獲得した。また昨年は3位だった藤脇が安樂に続き2完登、2位につけた。また今シーズン限りでの引退を宣言している大会出場者最年長の杉本が3位に入賞、ベテランの実力を見せつけた。

女子決勝は、上位3名が0.3ポイント差内に収まる大接戦となった。準決勝4位で決勝に進んだ野中は、1・2課題目を1アテンプトで完登し、3課題目も2アテンプトでクリア。最終的に84.8ポイントを獲得し、優勝を果たした。2位の関川は、1課題目と3課題目を1アテンプトで完登したものの、2課題目と4課題目でアテンプト数を要し、84.6ポイントで惜しくも2位。3位の中村は、1～3課題目までをすべて1アテンプトで完登し、最高75ポイントの状態で4課題目に挑んだが、ゾーン獲得(6アテンプト／9.5ポイント)にとどまり、最終的に84.5ポイントで3位となった。

【運営】

本大会は、過去に幾度もBJCを開催した実績を持ち、

国際大会の運営経験も豊富な東京都山岳連盟が主管。選手・観客双方にとってスムーズかつ充実した大会運営が実現された。

新たな取り組み #1

SNSを活用した事前の盛り上がり醸成

本大会が記念すべき第20回目となることを全面に打ち出し、SNS上でキャンペーンを展開。「#BJC20th」のハッシュタグを用い、過去20回のBJCの思い出をファンや関係者に投稿してもらう企画を実施した。JMSCAからの一方的な発信ではなく、選手やクライミング関係者、さらにはファンそれぞれの視点でBJCの歴史が語られる場が生まれ、大会開催前からSNS上での盛り上がりを創出することができた。

新たな取り組み #2

新たなファン層の開拓、地域・子どもへの還元

スポーツクライミングの普及と競技の裾野を広げるため、(公財)東京都スポーツ文化事業団と協力し、「トップスポーツ観戦事業」としてスポーツクライミング未経験者、特に子どもたちを念頭に観戦招待企画を実施。抽選で選ばれた約25組50名が来場し、多くの招待者にとって初めてのスポーツクライミング観戦となり、クライミングの魅力を伝える大きな一歩となった。

【さいごに】

スポーツクライミング競技会のあり方が様々議論される中、少しでも良い方向に向かえればという気持ちのもと、本大会を東京で開催することを決定しました。事前の企画や検討も含めて多くの方の尽力があったからこそ開催できたものだと考えています。

また、20回目の本大会の成功は今年度の関係者だけでなく、過去20年以上にわたるすべての関係者の献身によるものだと感じております。改めて心より感謝申し上げます。

(実行委員長 百瀬恭平)

SKIMO

速報 2025アジア冬季競技大会 SKIMO競技

第9回アジア冬季競技大会は、2025年2月7日から2月14日まで、中国のハルビンで開催されました。今大会には、過去最多となる34の国と地域が参加し、6競技64種目で熱戦が繰り広げられました。特に、SKIMO（山岳スキー競技）は今回初めて正式種目として採用され、注目を集めました。

日本選手団は、選手151名（男子78名、女子73名）、監督・コーチ等77名、合計228名で構成され、全11競技に出場しました。SKIMOには、アジアから9カ国、40名の選手が参加しました。SKIMO日本代表選手団にとって初めてオリンピックエンブレムを付け、TEAM JAPANとして参加する大会となり、大きな意義を持つ大会となりました。本大会はオリンピックの選考レースではないものの、日本チームにとって確かな手ごたえを得る機会となりました。

スプリント競技：安定した滑りと課題の明確化

2月9日に行われたスプリント競技では、日本選手団の健闘が光りました。男子では平林選手が準決勝に進出し、最終順位5位（2:54.72）を獲得。遠藤選手も6位（3:09.51）と上位に入りました。

また、島選手はペナルティ（+1:00）を受けたことで14位（3:40.07）となりましたが、ペナルティがなければ入賞の可能性もありました。

女子では田中選手が5位（3:41.19）、滝沢選手が6位（3:36.74）と安定した結果を残しました。白井選手は準決勝で敗退し7位（3:39.97）となりましたが、タイムによる



男 子			女 子		
1	Buluer	CHN	1	Cidanyuzhen	CHN
2	ZHANG Chenghao	CHN	2	YU Jingxuan	CHN
3	Yuxin	CHN	3	Suolangquzhen	CHN
4	LIU Jianbin	CHN	4	JI Lulu	CHN
5	HIRABAYASHI Ari	JPN	5	TANAKA Yurie	JPN
6	ENDO Kenta	JPN	6	TAKIZAWA Sora	JPN

男女混合			
1	Buluer	Cidanyuzhen	CHN
2	BI Yuxin 7	YU Jingxuan	CHN
3	LIU Jianbin	Suolangquzhen	CHN
4	SHIMA Tokutaro	TANAKA Yurie	JPN
5	HIRABAYASHI Ari	TAKIZAWA Sora	JPN
6	ENDO Kenta	USUI Natsumi	JPN



競技レベルの向上が感じられるレースでした。

トランジット（移行動作）は正確で、全体的に安定したレース展開ができましたが、ブーツセクションでは中国選手との差が顕著であり、今後の強化が必要です。

ミックスリレー：成長が見えたチーム戦

2月12日に実施されたミックスリレーでは、日本チームが着実な進歩を見せました。田中・島組が4位（29:36.29）に入り、滝沢・平林組が5位（30:26.66）、白井・遠藤組が6位（31:03.01）と、競り合う展開となりました。中国勢は1位から3位を独占し、1位チームのタイムは27:48.67でした。しかし、日本チームはArinsalでのワールドカップと比較すると、タイム差を大幅に縮めることができました。特に田中・島組は、第2ラップで6分20秒1と好タイムを記録。各選手2走目のスピード維持が課題であり、今後の強化が求められます。

コンディション管理：アスリートホテルでの生活

今回のアジア冬季競技大会では、選手が原点に返り、「全員がベストなコンディションで各自ベストパフォーマンスを出す」という目標を掲げ、しっかりとコンディションを整えました。宿泊環境は選手のコンディション維持に大きく貢献し、ジムの完備やドクターの常駐により、身体のケアがしやすい環境が整えられていました。

食事のバランスも良く、ワールドカップとは異なり、全員が万全の体調を維持できた点は非常に大きな成果でした。一方で、浴槽がなかった点は若干のストレスとなりました。近隣に温泉があり、もし利用可能であればリカバリーに役立った可能性があります。ワックスルームの共有やJOC本部のサポートはスムーズで、情報提供の迅速さも選手にとって大きな支えとなりました。

総評と今後に向けて

今回のアジア冬季競技大会では、日本チームの競技力向上が明確に見られました。スプリント競技では個別の課題が浮き彫りになり、ミックスリレーでは前半のスプリント力の向上に成功しました。また、宿泊環境の良さが選手のパフォーマンス向上に寄与したことも確認できました。

今後の強化策として、ブーツセクションの改善、スタート時の精度向上、持久力向上に向けたトレーニングの強化が求められます。アジア大会での経験を糧に、日本チームがさらなる成長を遂げることを期待したい。

（SKIMO 日本代表コーチ 堀部倫子）

鳥取県大山 令和6年度 冰雪技術研修会、コーチ2養成講習会報告

令和7年2月1日(土)～2日(日)

鳥取県大山において冰雪技術研修会およびコーチ2養成講習会が大山自然歴史館および大山南光河原にて開催された。

今回は研修4名、コーチ2養成講習9名、講師2名、鳥取県スタッフ4名の計19名での開催となった。

今年の大山は1月下旬、日本海で降雪があり講習には十分な積雪があり、両日とも天候に恵まれ、充実した講習が行われたものと思います。鳥取県山岳・スポーツクライミング協会の皆様には事前準備からご尽力いただきまして誠にありがとうございました。

以下に参加者の代表の感想を掲載いたします。

記：指導委員会 野村善弥

受講生感想

「令和6年度大山冰雪技術研修会に参加して」

広島県 福山山岳会 佐藤 竜也

先日の講習会では、JMSCAの講師をはじめ、学連スタッフのご指導のもと、実践的な研修を行えたこと、大変感謝しております。今回の研修では、スタンディングアックスビレイから自己脱出の訓練を中心に行いました。スタンディングアックスビレイは、あまり使用する頻度が少ない技術と言われていましたが、自己脱出で使用するロープワークなど大切だと感じる場所があったので引き続き訓練を行っていきたいです。その他、滑落停止、緊急ビバーク、支点構築の訓練など雪山登山を行う上で大切な知識、技術をたくさん学ぶことができました。また、初心者に対して指導方法も学ぶことができました。初心者の人ができないのは、指導者の説明や指導方法が悪いからだと言われたので講師の野村さんが言われていました。自分は人に説明するのが苦手なのですごく胸に刺さりました。今回の研修会で学んだことを所属の山岳会等多くの人にわかりやすく、的確に伝えたいと思います。2日間大変お世話になりました。



福岡県山岳・クライミング連盟 町元里香

山岳指導者冰雪技術研修会に初めて参加しました。伯耆大山には毎年登っているのですが雪とはほとんど縁が少ない九州在住で雪山の経験はあまりない身にとって、充実した研修でした。

午前10時に大山自然歴史館に集合し、午前中は机上での技術の習得、スタンディングアックスビレイの詳しい解説を受け、午後からは現地に移動して実技講習を受けました。頭の中では理解しているのですが、手袋を装着してのロープ操作はかなり難しいものでした。幸い気温が高かったので手指はスムーズに動きましたが、気温が低かったり、風が強かったりすると、更にロープ操作は難しくなるだろうと感じました。

宿に戻って、夕食後に翌日の講習ではロープ操作が上手くできるように復習を行いました。SABで滑落者を止めた後、ハーネスのループにロープをスムーズに固定させる動作やムンターヒッチを作ってアンカーにロープを固定する動作を何度も練習しました。

2日目は最初に雪上歩行の練習をしました。キックステップやピッケルの使い方などは雪山に慣れていないため難しかったですが、堤講師から細かく教えていただきました。「雪を怖がらず、楽しいと思って雪と向き合うように」と教えてもらいました。昨日できなかったSABも昨夜の復習の甲斐あってか、手袋をしての動作は遅いですがシステムはスムーズに進めることが出来ました。

午後からは雪上支点の作り方の講習でした。スノーピケット、スノーフルーク、土壌袋を使った雪上支点の作り方などの講習を受けました。一番感動したのはスノーボードで上部のロープの内側を補強することによって強度が驚くほど高まったことです。本当に勉強になりました。

毎年冬が来るたびに冬山知識を思い出すのに時間がかかり、そうこうしているうちあっという間に春が来ます。勉強不足、経験不足のせいです。今回の冰雪技術研修を機に、安全で確かな知識と技術を身に付けて正しく指導していけるように自分自身を磨いていきたいと強く感じました。

2024年度山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区)報告

遭難対策委員長 服巻辰則

2025年1月24日(金)～26日(日)に群馬県水上町の土合山の家にて、山岳レスキュー講習会(積雪期・東部地区)を開催した。年末年始を中心に大雪となり交通やフィールド講習場所の心配をしていたが、開催前数日間の高温傾向で講習に適した積雪量に落ち着いた

講習会参加者数は、クラス1(受講生20名)、クラス2(受講生19名)、クラス3(6名)、講師・スタッフ等(19名)の計64名となった。コロナ禍が明け、参加希望者が多く早期に埋まってしまうクラスもあった。

講習のクラス編成については全体構成を昨年から引き続き、雪崩による遭難の防止から搜索救助、ファーストエイド、搬送までを一貫して学べる内容としている。

クラス1は、特定非営利法人日本雪崩ネットワークと提携し、雪崩ネットワークのAvSAR基礎(コース雪崩搜索救助基礎:雪崩ビーコン搜索の基礎)とベーシックセーフティーキャンプの両方を一度に学べる登山者向けのプログラムとした。雪崩の基礎知識を学び雪崩被害に遭わないための学習に加え、雪崩ビーコンを用いた雪崩事故の搜索救助の基礎を学ぶコースとなっていた。講師は、雪崩ネットワークの理事である出川あずさ氏を迎え、雪崩ネットワークの雪崩業務従事者レベル1の資格保持者である委員と共に講師を担当した。

クラス2は、従来は雪崩ビーコンによる搜索救助に重点を置きすぎていたため、雪崩事故発生直後の搜索救助と被災者に対するファーストエイドを中心としたケアを主に取り扱った。登山医科学委員会の上小牧医師や国際山岳看護師である堀香奈委員によるファーストエイドの講習をクラス3と合同で行い、これを踏まえて雪崩ビーコンによる搜索、掘り出し、ファーストエイドを意識した被災者ケア、保温や搬送準備のための梱包、雪中ビバークの方法などを学んだ。

への搬送方法等を講習した。

クラス3は、一步進んで傾斜地でのロープを使った搬送を主要なテーマとし、ビーコンによる搜索から掘り出し、梱包、傾斜地の搬送を講習した。すべての対応において、クラス2と合同で行なったファーストエイド面も考慮して実施することを学んだ。

感想 (クラス1・山形県 齋藤由季)

私は、R6全国遭難対策協議会の出川あずささんの講義を聞いて、雪崩現場のレスキュー実態に興味をもち、受講しました。講習は内容が豊富で学ぶことが多く、私のメモ帳は乱筆であふれておりましたが、都度質問を受け付ける丁寧な進め方、理解度を確認する講師からの



質問(は、毎度ドキドキした)などのフォローアップにより、分かり易いものでした。屋外講義の雪と地形の観察は、現場を見ながらの講師解説でしたから、大変刺激的でした。私は山形の雪山で、風に吹かれた雪が舞う光景をもう何度も見ているのに、その先の光景を想像していなかったのだと気づかされました。チームレスキュー練習では、誰もが一生懸命で、皆同じ志を持つ者同士なのだと感動しました。一方で、ビーコン未装着の完全埋没者を探すのは困難で、ビーコン所持率100%が当たり前になればいいのにと痛感しました。多くの学びと気づきを下さった講師・スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

感想 (クラス2・東京都 安田宏記)

以前受講したクラス2、3の反復とスキルのアップデートを目的に、クラス2を再受講。2022年は4名だったのが今回はA班B班に分かれて計19名の大所帯と、精鋭の皆さんの意気込みに圧倒されました。私自身は、年齢を理由にしたくはないものの、ビーコン操作や掘出しなど、頭では判っているつもりでも中々身体が思うように動いてくれず、反復練習の意義を実感しました。また、今回の講習で特に考えさせられたのが、リーダーシップとフォロアーシップそれぞれの在り方でした。リーダー(役)の差配で行うチームレスキューに限らず、フォロアーは指示待ちだけではなく、自分の役割を認識し臨機応変に自主的にも行動することが求められます。しかしリーダーが、それを望ましいと任せるか、指示を逸脱した行為と判断すればどう軌道修正を指示するか、リーダーシップの発揮の仕方は非常に難しいと感じました。レスキューの応援をアプローチの仕方も考え方も異なる他のパーティーに求めた場合の協同、さらには地震等の災害時の救助救援活動においても同じことが起こります。互いの信頼と連携をどう維持して救助のミッションを達成するか。ケースバイケースと割り切ってよいものか。そんなこんなに思いを巡らせ、土合駅からJR各駅電車の乗換を何度か経て帰路に着きました。

感想 (クラス3・山形県 伊藤文善)

私は、公的救助機関に所属していますが、支点構築・

確保、低体温症のラッピングやその搬送方法は私の組織とやり方に違いはあれど、現場で活用できるものであ

り、大変勉強になりました。活用できる技術を増やすことは、現場において装備品が足りないなど不足の事態が起きた時などにおいて対応力を高めることになり、それは要救助者の救助だけではなく、救助者の安全管理にもつながるとあらためて思いました。全国の志ある方と交流できたことで、もっと学ぶべきことがあると痛感し、



自身の救助技術を見直す良い機会になった有意義な講習会でした、ありがとうございました。

なお、本事業は、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成を受けて開催された。



2024年度 AvSAR 上級講習会 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

日本雪崩搜索救助協議会 (AvSAR 協議会) は、以下の6団体で構成されている。

公益社団法人日本山岳ガイド協会

公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会

長野県山岳総合センター

公益社団法人日本山岳会

日本勤労者山岳連盟

特定非営利活動法人日本雪崩ネットワーク

AvSAR 協議会は、雪崩災害発生時に現場付近に居合わせた人が一致協力することで、要救助者を迅速に搜索発見し、公的機関の救助隊に速やかに引き渡すことで生存救出率を上げることを目標としている。

この目標のため、AvSAR 協議会では、大規模な雪崩事故現場にも対応できるよう組織的救助方法の標準化及び訓練コースを実施している。特に関連団体間で用語や技術の統一を図ることで、現場で搜索救助活動に関わる人の所属に関わらず混乱せずに協力できるようになる。

JMSCA 遭難対策委員会の開催する積雪期レスキュー講習会で取り扱う雪崩搜索救助関連の用語や技術は AvSAR 協議会のマニュアルに基づいて行なっている。

AvSAR 協議会では、大規模な雪崩搜索救助現場で指揮者として活躍できる人材育成のために上級講習会を開催している。例年は平日3日間コースと週末3日間コースの2回が企画されるが、今年度は週末開催コースの応募者が少なく、平日コースのみが開催された。



開催された講習会は、2025年2月12日(水)～14日(金)に、長野県白馬村の柵池高原スキー場周辺で実施された。上級講習会には参画する各団体から講師・スタッフを派遣することになっており、JMSCA 遭対からは専門委員の鎌田智子(岩手県、2023年度上級講習会受講)を派遣した。また委員長の服巻は AvSAR 協議会の講師として参加した。

受講生は、インフルエンザ等の流行で直前キャンセルが相次ぎ7名の受講生であった。受講生の内訳は、一般山岳会所属、登山ガイド、自衛隊員、警察官、消防官であった。講師・スタッフは、JMSCA の他、日本山岳ガイド協会、日本雪崩ネットワーク、長野県山岳総合センターから派遣され総勢6名体制であった。

講習1日目は雪崩ビーコンを中心とした基本スキルの確認から始まり、深い埋没、多数の近接埋没など応用技術の講習も行われた。雪崩ビーコンを所持しない要救助者の搜索のためにプローブラインの講習も行った。

講習2日目は、広いフィールドで単純な複数埋没から、多数の埋没現場、離れた埋没現場、あるいはさまざまな現場を混乱させる要因を加えたシナリオが用意され、受講生は現場を指揮管理する方法を学んでいくカリキュラムとなっている。

講習3日目は、山岳地域の自然地形を利用して総復習となるシナリオ演習を行なった。障害物、傾斜など平地での練習では気が付かない点も多く、いい気付きの場となったと思われる。

受講生はいずれも取り組む意欲が強く、熱心に学んでいた。今年度は JMSCA 関係者からの参加がなかったが、ぜひ雪山に行くリーダー的立場の方に受講していただきたい講習と思う。

ただ、雪崩ビーコンによる搜索技術が未熟な方が例年見受けられるため、JMSCA の積雪期レスキュー講習会などを受講して、基礎技術を膝下路整えてから挑むことをお勧めする。

困難さも求めず

川原 庸照

「危険はあるが困難はない」昔ヒマラヤのポーターから聞いた言葉だ。言いえて妙だ、まさに中米のクライミング。困難さも求めず、開拓魂も持ち合わせず、行き当たりばったりで登ってきたが縁あって25年ぶりに中米エルサルバドルの岩場を登り始



近年治安が格段に改善したエルサルバドルは、数年前までは10万人あたりの殺人率は世界トップクラスと言われていたにもかかわらず、現在中米一といわれるくらいには治安が改善している。その反面隣接するホンジュラスやガテマラの治安はよろしくないとの噂はあるが、日本にいれば悪いニュースしか聞かない中米にもクライマーは存在し、ゲレンデもクライミングジムも存在している。手ごろなクライミングのゲレンデは首都サンサルバドル郊外にあり車で30分ほど。週末ゲレンデとしては最高のロケーションである。しかし困難さを求めない怠惰なクライマーとしては手ごろなルートを数本登ると早々に引き上げ、帰りの道すがらローカルバスに乗って街に繰り出し、現地ののおっちゃんたちに交じりながらビールを飲んで家路につくという、大変立派なラテン系怠惰な週末クライマーと化している。

ところで本題のエルサルバドルの岩場だが、エリア名はプエルタ デ ディアブロ、スペイン語で悪魔の門と呼ばれているのは、'90年代には既に地元クライマーたちによって開拓が始まっていた。岩質は礫を多く含んだ火山性の岩質。日本だともろいイメージがあるかもしれないが比較的固く、ボルトの多くはケミカルアンカーが設置されている。30ルートほど設定されているのだけれど、近年エリア周辺は観光開発がされたため観光客に囲まれて登るには気が引けてしまひすたれてしまっているルートも存在する。グレードはフレンチグレードで6〜8aぐらいまでであるがエルサルバドルのクライマーはグレードを追っているわけでもなく登りやすいところをのんびりと登る週末のエクササイズ重視のクライマーが多い？と思っている。こののんびり感はやがて気持ちのいい週末の過ごし方だ。

ルート中に点在する礫をホールドとして登っていくルートが多い。しかしルートによっては礫のかかりが甘いものも多く、使える礫を探しながら登るのでグレードが低くても変化に富んで面白く下からガバに見える礫にたびたび騙されるのは非常に楽しい。ただ惜しむらくはボルトの設定位置が悪いものが多く感じる。1ピン目が高すぎたり、グラウンドフォールの可能性が高かったり。

サンサルバドルのクライミングジムはエアリアルヨガ？
 の様な施設(ただ正式名称はわかりません)や筋トレや



サンサルバドルのジム



プエルタデディアブロ ホンジュラスの岩場

フィットネスをしている人たちもいて複合エクササイズジムの雰囲気ではある。クライミングウォールは10日に一度くらいはホールドの入れ替えを行っていてたまに遊びに行くといつも新鮮な設定がしてあって面白い。高グレードを追求する雰囲気ではないが、ムーブの面白さを追求したセットがあったりして単純に耐えるだけ細かいだけみたいな動きは少ないと感じる。ここでの雰囲気も仕事帰りに体を動かしに遊びに来ているクライマーが多いようだ。

エルサルバドルでは山岳連盟も組織されており国内ハイキングの企画が立てられ参加者の募集の投稿がFacebookにあがり、岩登りの講習会も行われており徐々にアウトドアスポーツ人口は増加しているようだ。これとは別に旅行会社の登山ツアー募集のページも見られるようになった。これも国内の治安が回復していることと関係しているのかもしれない。25年前エルサルバドル人のクライマー何人かとホンジュラス国境近くの山奥の岩場にクライミングに出かけたときは、銃を携帯していた友人もいた。人気の少ない山奥で何があってもおかしくはなかった。しかし今では、キャンプ場ができ、ハイキングコースには観光客で賑わっているらしい。様変わりしているようで、よいことだが少しさびしさもある。

昨年、ホンジュラスの岩場の情報を仕入れたので8月に、ホンジュラスの首都テグシガルパにクライミングツアーに出かけた。25年前にはガテマラ、エルサルバドルのクライマーしか知り合うことはできなかったのだが。ホンジュラスの岩場が開拓されたのもそんなに古いことではないとのことだ。

その岩場はテグシガルパの郊外、車で30分ほどで移動し、あとは20分ほど山道を下ったところにあった。岩質は凝灰岩?だと思われる。岩場は横に複数のエリアが続いておりほぼ垂壁ぐらい。適度にはしるクラックやカチホールを繋ぎながら登る。グレード的にはそんなに難しくないが快適なルートが多い。この日はひとまず登れそうな手ごろなルートを片っ端から登った。最後に「これからビールを飲みに行くだろう」とその日知り合ったばかりのホンジュラスクライマーに声をかけてもらい「当たり前だろ!」と答え充実した一日が終わった。

ふらふらと登ってきた自分にはこれぐらいのゆるい空気のクライミングが合っているような気がする。多分世界中に、知らない岩場を知らないクライマーが登っているのだろう。クライミングの楽しみはそんな各国のクライマーの空気感に触れるのも楽しみの一つなのだと思う。困難さも新しさも冒険もないが楽しいクライミングだ。最後に、もし中米のクライミングや旅行に興味を持っていただいたならばぜひとは思いますが、くれぐれも安全には気を付けてください。ここエルサルバドルは治安が一応は回復しましたが中米の政情など信用できないものですから。

東京都山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動

東京都山岳連盟自然保護委員会では年間を通して様々なSDGsな活動をしています。春・秋の自然観察会、カタクリパトロール、クリーン・キャンペーン、おもしろ地球観察会、樹木観察会、雲取山調査山行、自然保護指導員の認定講習会、自然保護指導員研修会、専門委員研修会、指導員通信、水質調査、環境省自然公園指導員の報告とりまとめ等を実施しています。

一部紹介させていただきます。

JMSCA自然保護指導員の新規認定の募集は、一般募集の他にプロガイド委員会・指導委員会の机上講習会に出向いて自然保護をテーマに講義を行い、自然保護思想や山のマナーを伝えています。同時に、この講習は自然保護指導員の机上講習にも位置づけて、実地講習を受ければ指導員資格が得られるようにし、自然保護指導員の拡充を図っています。

資格取得のための実地講習は、今年度は昨年度に続きあきる野市の城山付近の里山であるあきる野市レンジャーに講師をお願いし、“熊の痕跡を見ながら、その生態や生息状況を学ぶ”をテーマに実施、非常に興味深いものでした。机上と実施と併せて受講することにより、山岳環境に関する専門委員及び自然保護指導員としてスキルアップを図っています。

また、更新者のために毎年1月にJMSCA主催、東京都山岳連盟主管による自然保護指導員研修会・公開講演会を実施しています。この研修会は長年の実績により指導委員会のスポーツ指導者のための研修ともなりました。今年度は山本清龍先生に山のオーバートーリズムの話をしていただきました。初めての試みとしてJMSCAの全国の自然保護委員会にアナウンスし、28名の参加者があり非常に実りのあるものでした。

自然保護委員会専門委員の研修は、ここ数年三つ峠で実施しています。

三つ峠の自然環境を守り適正な利用を進めることを目的に設立された「三つ峠ネットワーク」の代表も務める三つ峠山荘のご主人中村幸吉氏から、三つ峠の自然環境の変化の説明を受けると共にアツモリソウ観察し、他県(埼玉、神奈川、新潟、山梨)の岳連の方々とテンニンソウの除草作業をし、日本山岳会自然保護委員会とも交流することができました。

環境調査としてはカタクリパトロールを実施しています。奥多摩で数少ないカタクリ群生地である御前山でのカタクリ保全活動で、開花期間中にカタクリ保護を訴える看板を登山道に設置し、カタクリの株数についての定点観測も実施しています。御前山のカタクリは、温暖化の影響やシカによる食害の一層の激化で激減、各所に防鹿柵が設置されました。柵内にはカタクリの花株が増しており、防鹿柵の効果を実証しています。

雲取調査山行(夏・冬)は、一般募集して雲取山の環境を解説しながら登山。特にシカの食害、山荘・避難小屋のトイレ使用状況などを説明し、閉鎖された奥多摩小屋周辺の環境調査も実施してきました。

奥多摩小屋跡地に、環境省の補助金を利用してエコトイレ設置の可能性を探るなど、登山者の立場から、行政、関係機関に要望を行い、奥多摩小屋周辺の機能維持と環境保全を求める活動をしています。2025年度には新しい管理棟とトイレが完成して、4月末には五十人平野営場オープンまつりが開催され、営業も開始される運びとなりました。

山をとりまく環境は登山道から始まり里地里山の荒廃、野生動物の食害、開発、トレイルランニングの問題点と山積みですが、しっかりと活動していきたいと思えます。

(東京都山岳連盟自然保護委員会委員長 猪狩ノブ)



おもしろ地球観察会



断層観察



指導員実地講習会

2024自然保護指導員研修会および 公開講演会報告

2025年1月26日13時30分より、JMSCA主催、東京都山岳連盟（以下、都岳連）自然保護委員会主管による「2024年度自然保護指導員研修会および公開講演会」を国立オリンピック記念青少年総合センター会議室で開催した。14回を数えるこの研修会は、既に自然保護指導員として活躍している方、これから自然保護指導員を志す方に向けて、自然保護指導員として活動するにあたっての基礎的知識や自然への一層の理解を深めるための研鑽の機会を提供するものである。また、都岳連傘下のスポーツ指導者に向けて、山岳スポーツのフィールドである自然環境への知識を得て頂くために、都岳連指導委員会の協力も得て、スポーツ指導者の義務研修の一環としても実施、併せて「公開講演会」と銘打ち山岳環境保護・保全に関心のある市民の参加も可としている。今回は、本年4月からの自然保護指導員規程改正の眼目の一つ、資格取得・更新に必須とした「講習会」に岳連・協会の枠を越えて参加できるようにした初の試みとして、都岳連の協力を得て実施、全国から会場56名、オンライン26名の計82名が参加された。

冒頭、都岳連廣川会長より主管のご挨拶を頂き、続いて小高より「自然保護とは生物の多様性を守ること」であり、「持続可能な利用」を目指す『保護』と『完全な保護』強調する『保全』それぞれのアプローチが、環境や生物多様性を維持するために必要であるとの視点から『山岳の自然保護・保全』についてお話し、昨今の山岳環境を巡る諸問題にも言及、更に『自然保護指導員』制度に関しては、指導員規程と細則の主要な改正点について触れたが説明は全く足らず、今後全国の自然保護委員会及び指導員に向けて様々な方法で説明していくことを約して締め括った。

続いて小島副委員長より、JMSCAで進めている「JMSCAフレンド」への自然保護指導員資格登録について、自身のマイページを例にとって今後備えられる便利な機能と現状についての説明、全国の指導員の初期登録を進めるためにデータ収集への協力を改めてお願い



した。

続いて、茨城県、群馬県、埼玉県、千葉県、神奈川県（報告書のみ）、東京都の関東ブロックの自然保護委員会からこの1年の具体的な活動報告を頂いた。各委員会とも少予算、担い手の高齢化等々の問題を抱えながらも地道にSDGsな活動を続けている。新たな担い手として新規の自然保護指導員に大いに期待が寄せられる。

休憩を挟んで、公園計画と観光地計画を専門領域とし富士山、尾瀬など世界遺産、国立公園等のフィールドにおいて質の高い自然体験を提供する空間計画手法について研究を進めていらっしゃる東京大学助教山本清龍先生より、『山岳のオーバーツーリズム～資源管理と来訪者管理に登山者はどう貢献できるのか～』との基調講演を頂いた。オーバーツーリズムが社会問題化されて久しい。週末や例えば花の時期に過剰利用され、混雑や渋滞を招くりソースを、通年・平日への分散化や他の目的や体験にどう利用させていくかの調整手法、登山者数や公園利用者数の調整に向けて行動規制する根拠法や種々の社会実験についてお話を頂いた。解決策の一つとして例示頂いた、ボランティア等の労働力の提供、入山料や寄附等の経済的貢献等の相応の負担を登山者、公園利用者に課す管理手法に大いに期待したいと思う。

講演後、指導員登録・更新のための事務連絡、主管の猪狩都岳連自然保護委員長より閉会挨拶があり、研修会は予定通り16時40分閉会した。

（自然保護委員長 小高令子）

寄贈図書

兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」692号	会報	（株）山と溪谷社	釈由美子の「山の常識110の疑問」	寄贈本
（公財）健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 562	会報	東京野歩路会	「山嶺」VOL.102 No.1140号	会報
日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.586	会報	おいらく山岳会	「山行手帖」783号	会報
（株）日本運動具新聞	「スポーツ産業新報」No.2456、No.2460、No.2461	新聞	（一社）愛知県山岳・スポーツライミング連盟	「愛知岳連ニュース」第455号	会報
（株）ネイチャアエンタープライズ	「岳人」2025March No.933、No.933	寄贈本	やまびこ山想会	「やまびこ」第216号	会報
（株）山と溪谷社	「山と溪谷」2025年3月号	情報誌			

○日 時：令和7年2月9日(日)

10:00～16:30

○会 場：Zoomと対面 (Japan Sport Olympic Square 3F第一会議室) によるハイブリッド会議

1. 開 会

(1) 蛭田会長挨拶

本日は、岳連の実際の運営をされている理事長の皆様と忌憚のない意見交換ができればと思います。また、今月から来月にかけて、ジャパンカップやスキーモの大会も予定されており、メディアへの露出も多くなっています。山岳については、外国の方の事故が増えるとともに、道迷い、動けなくなったといった事故も増えつつあります。今後も皆様のご協力をお願いします。

(2) 出席者確認

出席者(役員、委員長)

蛭田会長、古賀副会長、吉田副会長、小野寺専務理事、赤尾事務局長、町田常務理事、野村常務理事、望月・栗田・安井・小高・佐藤・中島・西谷・畑中・前田理事 以上16名

佐久間監事 以上1名

青山・百瀬・水村・西原・奥野・奥井・角田・松本委員長 以上8名

欠席役員：濱田・小田部・島田・杉本・中橋・樋口・平田各理事 以上7名

古屋監事 以上1名

欠席委員長：服巻・谷口・岩崎・竹田各委員長 以上4名

出席者(都道府県理事長(含代理)、高体連登山専門部)

山納秀俊(北海道)、四戸義継(青森)、小野寺修(岩手)、大槻聡(宮城)、井上邦彦(山形)、渡辺敏夫(福島)、西内博(茨城)、芳賀真治(栃木)、佐藤光由(群馬)、天野賢一(埼玉)、関研一(千葉)、桜井進(東京)、伊藤靖雄(神奈川)、望月啓治(山梨)(役員)、今井浩二(新潟)、中島俊哉(長野)、開澤浩義(富山)、米田正明(石川)、榊田靖憲(福井)、木ノ内高嘉(静岡)、北村憲彦(愛知)、草川明(三重)、水谷嘉宏(岐阜)、片岡幸一(滋賀)、加藤宗利(京都)、石田英行(大阪)、難波悌次郎(兵庫)、前田善彦(奈良)(役員)*、白子欽也(和歌山)、渡辺公二(鳥取)、豊田和司(広島)、鹿野慶行(山口)、明上邦彦(香川)、椎野彰浩(徳島)、福永幹郎(高知)、山上司(福岡)、武末良樹(佐賀)、前川文雄(長崎)、松井清明(熊本)、木下和幸(宮崎)、井原広茂(鹿児島)、大宜見朝(沖縄) 以上40名

欠席理事長：山田雅之(秋田)、富田一志(島根)、山崎裕晶(岡山)、竹田豊明(愛媛)、石川明德(大分)、佐橋秀男(高体連) 以上6名

会長が議長になる。

ホストは小野寺専務理事が務める。

議事録署名人は、会長及び監事。

2. 報 告

(1) 令和6年度上半期事業報告・決算見通しについて

小野寺専務理事と、赤尾事務局長が配布資料を基に説明した。

(2) 財政再建計画・現状報告について

吉田副会長が配布資料を基に説明した。

(3) 第二次基金募集について

赤尾事務局長が配布資料を基に説明した。

(1) から (3) の説明後、以下の質疑応答があった。

質問) 昨年度実績に比べて、大会施設費用7,000万円程支出が少ない理由は何か。

返答) 八王子WC(5,500万円)、倉吉BLJC(1,500万円)を昨年度行ったが、今年はおこなわなかったから。今のところSC競技の収支は、予算内となっており、順調である。

(4) 令和7年度計画について

赤尾事務局長が配布資料を基に説明した。

(5) 2022年度赤字における理事の責任決議について

蛭田会長が配布資料を基に説明し、今年度及び次年度以降も理事全員が、一致協力し対応することを決議した旨を報告した。

(6) 役員選考規程改定について

古賀副会長が配布資料を基に説明した。役員立候補申請の締め切りについては、3月10日(月)までに延長した。積極的に立候補をお願いします。

(7) 各岳連からの現状報告について

加盟団体 現状報告

北海道 山岳・スポーツクライミング連盟に名称変更した。北海道スポーツクライミング大学選手権を始めた。知床岬への工事が中断された。廃道が7つの団体と共同して復活した。バックカントリーの遭難に対して、チラシを配布するなど対策に乗り出している。

青 森 来年国スポを行う。準備を開始した。

岩 手 昨年5月リード、ボルダーの競技会が行われ、スタッフが逼迫したが、何とか対応した。岩手山が10月に地震があり入山禁止となった。

宮 城 今年7月12,13日に東北スポーツ総合大会を実施予定。昨年11月C級審判の講習会が行われありがとうございました。

山 形 スキーモで、岳連が知らなかった人が放送に出てきた。本年3月末で1団体が脱退予定。主な役員が引退を表明しているが、なり手がおらず苦慮している。県スポーツ協会の負担金の費用負担が大きい。

福 島 加盟団体：16団体。山の日に清掃登山で56名が参加した。指導委員会：52名、年5回活動。コーチ1養成講座に6名参加した。高齢化と団体数減少が課題。

茨 城 SCを中心に約30名が活発に活動して、自主運営できるようになっている。選手が岳連に入ることになっていないのが課題。審判等の資格が団体でないと取れない。役員のなり手がいない。

栃 木 SCは、運営はうまくいっている。リードについては他県に協力をあおいで

進めている。現在23団体だが、高齢化しており心配である。

群 馬 関東ブロック大会を6月末に開催の予定。2029年度国スポ準備を始めた。

埼 玉 岳連設立70周年記念事業、式典、祝賀会の準備を開始。競技と山岳を分けるべきではないかと考えている。関東岳連とも情報交換、相談をしている。

千 葉 昨年全日本登山大会を実施した。荒れた登山道の修復事業を行っている。各団体と協力して実施。SCは順調に大会を実施している。

東 京 1月末時点で139団体、個人会員は421名、15委員会を中心に講習会、研修会を実施している。2025年度に新しい事業の計画もしている。組織基盤の強化、会員増加、SCの強化、登山技術の普及、遭難対策の5つの柱で考えている。

神奈川 11年に岳連設立70周年記念式典を行った。平山氏、鳴海氏に講演をしてもらった。50団体で800名いる。個人会員は35名。資格者は夏山リーダーは41名、山岳コーチは160名、SCコーチは40名となった。審判資格をとる人が増えてきた。佐賀国スポでは、男子3位、女子8位となり、健闘した。

山 梨 SCの担い手がおらず、今後SC競技開催は難しい。その中で、協議を開始した。伊藤氏がSC関係の業務を受け、やっていくということを検討している。今後SCに特化した団体を作り、山梨岳連に参加、山梨岳連は登山に傾注するという方向を検討中である。

新 潟 アジア山岳連盟平和祭、全日本登山大会を続けて開催し、何とか終了した。板倉町の廃校を利用した壁を確保。来年大きい壁にしたい。

長 野 大西副会長死亡のお分かれ会を11月に実施した。2028年国スポ開催に向けて、昨年度から準備室が開室した。

富 山 国立登山研修所と一緒に安全登山研修会を実施。内容は充実しているが参加者が少なめ。登山道維持に関わる事業もあった。4月はSCブロック大会を予定しており予算化に苦慮している。岳連の存在意義を考慮しつつ競技団体とどう残るか山梨の取組方法も参考にしたい。

石 川 昨年は能登地震への全国から震災援助ありがとうございました。加盟団体の脱退と、高齢化が進んでいて事業をできない状況になりつつある。スポーツ協会から、アーバンスポーツとしてボルダー競技大会を、小松で行うことを検討している。七尾でも行うことを検討している。

福 井 加盟団体数16、山の日にあわせて、記念登山を実施することを検討。活動内容を県民の皆さんへ知っていただくことが必要。登山整備や、山小屋の維持管理にも着手し、社会貢献していることを知ってもらえるようにしたい。

静 岡 加盟団体数減少、高齢化が進展しているので対応に苦慮している。講習会の指導等はできているが、指導者の高齢化が課題。遭難対策と指導委員会を一緒にする予定。ボルダー、リード大会開催の話もあるが、運営する人が少ない。

愛 知 加盟団体数が毎年2-3団体減少、

高齢化が進展。低山を中心に、若いトレラン選手を取り込めないか、助成金をいただけないか等を検討している。クライミング大会も、ブロック大会等、無理なくできれば助かる。近隣の方にも協力を得ていきたい。

三重 2月にSCジャパンカップ開催予定(伊賀)。三重県警察の山岳救助研修会の業務を受託した。熊野市の灌木除去事業を受託した(一年の実地研修後)。

岐阜 加盟団体数減少、高齢化が進展している。2月に発生した蒲田富士の遭難で、ドローンを活用して遭難者を発見。ドローンの課題もあるが活用方法もあると考える。こういう遭難事例でもJMCSA山岳共済事業が使えたと実感した。R7年度は東部地区安全登山講習会開催の予定。

滋賀 今年10月国スポ開催予定。人材不足なので、他県から応援を得て対応予定。県内の宿泊場所の確保が難しい。

京都 社団法人となり4年たつ。加盟団体30、個人会員130名、SCが約半数。残りが一般。年間スケジュールは順調にこなしている。夏山リーダー養成、自然保護活動等も行っている。

大阪 加盟団体39団体、個人会員139名、指導者不足で、指導者を育てるために、岳連として指導員を派遣する場合には、旅費等の負担もしている。パーソナル会員の中から人を育てることも考えている。奈良県と協力しあっている。

兵庫 加盟団体23団体で、高齢化が問題。神戸登山研修所は令和10、11年に建て替えを予定。登山研修所の壁の維持に苦慮している。令和7年度10/25～27で全日本登山大会開催予定。一般、健脚、フリークライミングの3つのコースを予定。高体連にも参加していただく予定。

奈良 加盟団体10団体(SC6団体、登山4団体)。ジム中心で活動し、保護者が加わり、SCとして山岳会を立ち上げている。大阪と協力して大会実施。

和歌山 加盟団体7団体(SC3団体、一般3、高体連1) 葛城修験道にソーラーパネルが設置されそうになったところ中止となり、自然保全された。SCについては梅の里ボルダリング、登山については紀の国トレッキング(少年少女登山対象)を例年どおりおこなっていききたい。

鳥取 加盟団体15(高体連校を含む。SCのみ4団体)。選手は、SCのみ参加。登山は高齢化。普及活動を行っている。遭難対策委員会が最も活性化している。自然保護委員会も露出度が高い。

広島 インターハイよろしくお願ひします。

山口 ジュニア育成事業を実施している。一般、高校生を対象にしている。登山届を提出することで、遭難防止に役立てていきたい。

香川 他岳連と同様。次年度役員改選を控えているが、なり手がいない。指導者、リーダーが少なくなっている、コーチ資格をとれるようにしたい。SCは実質、別に活動してもらっている。

徳島 高齢化が進んでいる。SCは金銭的に難しい。登山については、少年少女登山教室は、申請が遅れ、助成金がもらえな

かった。

高知 安全登山西部地区研修会は、主管として実施し、意義ある研修会として再認識した。高い評価をいただいた。

福岡 英彦山でインターハイ実施、ご協力有難うございました。1月は、リード、ボルダー、スピードを実施しているが、今年はスポンサーはつかない見込み。夏山フェスタは、6月下旬に例年4000人くらい参加予定。ゲストスピーカーは渡邊直子氏を予定。課題は、他の岳連と同様。

佐賀 国スポに多数ご来県いただき有難うございました。昨年2、3月で、SJC、BJC、LJCを開催した。6月はリハーサル大会、今年も2月にSJC、SYCを実施予定。九州クライミングベースが活用された。加盟団体数4、うち高体連1、SC2、登山1となっている。登山については、来年度九州大会を予定、準備している。国スポ報告書は現在作成中。

長崎 加盟団体数：11(含む高体連)。2/15、16 ブロック研修会。7月九州ブロック大会を予定。少年少女登山の助成を今年もお願いしたい。山の日には、一斉清掃登山を予定。

熊本 加盟団体数：6 SCでは、コーチが増えたので、競技運営の体制はできた。また、ボルダーについて、ジムとの連携ができるようになった。リードはやる人が少ないので、体制づくりに苦慮している。登山については、高齢化しているが、阿蘇遭難対策防止協議会に参加し、盛り上げていきたい。

宮崎 九州ブロック大会は、佐賀の施設で実施した。2027年度国スポ開催に向けて準備中。R7年度 安全登山指導西部地区研修会を11月に開催予定。

鹿児島 山の日の活動として、遭難対策として登山計画書提出の呼びかけ、SCリードの壁があるが安全性を担保するために壁の改修を行いたい。

沖縄 SCコーチが7名受講。審判は6名しかいないので大会運営が難しい。JMCSAの協力が欲しい。

(8) 質問事項とその回答、質疑応答について
各岳連から出された質問について、配布資料を基に、担当理事、委員長が説明し、意見交換した。

大阪：岩場のリポート、アクセス、ドライツーリングについて(小野寺専務理事) ガバナンス委員会(小野寺専務理事)、SDGs推進委員会(前田理事)、加盟団体振興推進委員会(古賀副会長)。

京都：山の日の活用について、山小屋の予約がとれないことについて(小野寺専務理事、野村常務理事、前田理事) 全山遭あるいは、JMCSAと交流のある代議士をとおして、岳連からの声として報告、相談することを検討する。(JMCSA) スキーモをJMCSAが取り扱うことの状況について(赤尾事務局長)

兵庫：1. 国スポユニフォームについて(西原委員長)

— JSPOのユニフォーム規程に、JMCSA独自の規程として追記している部分について

— 広告の規制を廃止する件については、JSPOに対しての働きかけをしていく。

2. JMCSAフレンドのデジタル会員証表示、費用対効果、今後の方向等について(蛭田会長)

JMCSAフレンドに登録される個人は、定款上でどう位置付けされるのか、所属はどうなるかを明確にすること、セキュリティの2点を明確にしてほしい。→検証して明確にしたい(JMCSA)。

北海道：1. 事業計画について(小野寺専務理事)

SC関係は日程の未定部分がある。2～3月に予算が決まったら、日程だけでも早めに連絡するようにしたい。

2. AD研修について(赤尾事務局長)

SC大会の日程が、確定しないと日程を設定できない。AD研修日が確定次第アナウンスできるようにしていきたい。選手層を3～4種類に層別し、各層に合わせた研修方式を提供することを検討している。現在、詳細仕様を検討中。

3. ブロック別研修会での討議とまとめについて(西原委員長)

今後、ブロック別研修会について配慮するようにしていきたい。

愛知：1. 国スポ山岳競技の見直しについて(西原委員長)

全国大会はルールを順守しなければならない。SCの場合、都度仮設壁のセットを用意しなければならない、定着しない。各県が無理なく対応できるように、自分たちで不都合なことは、主体的に変えてくことが必要ではないかという問題提起がされた。

2. JMCSAは何のためにあるか(蛭田会長)

安全登山のための技術、知識などを普及させること。技術、知識の蓄積と岳連へ展開をすること。岳連や関係機関との協力もJMCSAがあるからできている。また、行政や海外IFへの働きかけ等もJMCSAがあるからできている。

3. SNSを通じた山岳知識や、技術の公開がされているが、JMCSAとして正確な情報の定着と、その展開をどう徹底していくか(内容の精査と展開)という課題があるのではないかと問題提起された。

(9) 諸般の報告等について

望月理事が、共済会の特典の紹介及び、Webでの入会状況と、新年度の共済会のしおりを紹介した。

加入促進キャンペーンは2/14～6/13まで行うので、ご協力をお願いします。

当説明資料を後日、関係者に送付する。

保険金の割引率は、保険金の支払いが増加したため、値引き率が減っている。

3. 閉会

蛭田会長が、閉会を宣言した。

以上
令和7年2月9日 記録 赤尾 浩一

○日 時：令和7年2月13日(木)

13:00—17:05

○場 所：JSOSビル3F会議室4及びZoom

○出席者：蛭田会長、古賀・吉田各副会長、
小野寺専務理事、赤尾事務局長、野村・
町田各常務理事、小高・小田部・佐藤・
島田・中島・中橋・西谷・畑中・前田・望月・
安井各理事 以上18名
佐久間監事、古屋監事以上2名

○欠 席：栗田・杉本・濱田・樋口・平田
各理事以上5名

1. 開 会

2. 蛭田会長からの挨拶

理事の皆様、全国理事長会議は、お疲れ様でした。今後、ジャパンカップと、スキモが控えていますが、資金確保を含めて審議ができればと思います。よろしくお願いします。

3. 会議成立状況報告

理事数 開始時23名中18名出席(定款第33条、定足数=12名(1/2超))

監事数 2名出席

4. 議長選出

蛭田会長が議長を務める。(定款第32条)

5. 議事録署名人

会長及び監事(定款第34条)

6. 議題(注. 審議順に記載)

議案第1号 議事録の承認について(前回第12回の議事録について)

全員承認済となった。

議案第2号 常勤役員の賞与のプロセスについて(報告)

赤尾事務局長が、内規に基づいて実施している賞与支給承認プロセスの現状説明をした。従来メールでおこなっていたが、回議書を使用した手順となっており、昨年12月に支給された金額についても、令和6年度の予算に盛り込まれている旨、補足説明した。事務局の人員体制については、担当者と担当業務を随時報告する。賞与の制度設計については、別途明確にしていく。

議案第3号 審判員等の待遇改善について

当提案は、SC部内で未協議なので取り下げとなり、技術委員会で協議することになった。

議案第4号 審判員資格の承認について

ガバナンス委員会直下の資格審査会が審査となっているが、審判員各自の評価自体は、技術委員会であらかじめ審査、認定をすることが必要である。

今後は、常務理事会で承認し、理事会報告という内容で規程に追加することになった。尚、今回提示された審判員は異議なく承認された。

議案第5号 海外登山奨励金(後期)について

小野寺専務理事が、配布資料を基に申請してきた三隊の概要を説明した。

一隊(増本隊：パキスタン、コズ・サール)のみを海外登山奨励金選考委員会が推薦提案していることを報告し、提案の通り異議な

く承認された(40万円)。

反対0名、棄権0名、賛成18名

議案第6号 SC指導員規約改定について

野村常務理事が、配布資料を基に説明し、令和6年度のコーチ3資格受講条件(コーチ1でもコーチ3を資格取得できる箇所)について、特例措置としてきた尚書き以降を削除し、令和7年から従来の形に変更した旨説明した。異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成18名

議案第7号(追加) 業務委託について

現行業務委託が、5月で契約満了になっているので、2月末までに今後の方針を伝達する必要がある。

契約継続を前提とし、既存契約書の内容変更(業務内容、報告内容、契約者を会長へ等)や継続条件を加えることを条件とすることを審議し、以下のように異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成18名

契約書の内容は、ガバナンス委員会で検討するが、SC部からの要望も盛り込む(5月末日途で、契約内容を確定)。

他の業務委託者について、本年3月末をもって事務局の業務引き継ぎは終了予定。業務委託料金は変更予定。4月以降は、SC委員会業務(競技、普及、メディア対応)が継続される。

議案第8号(追加) 月報配布方法変更案について

前田理事が、現行の配布先リストから以下のように層別して対応することを提案した。

1. 継続必須(公的機関、メディア)：115件
2. JAC支部：各宛先に確認：30件291冊
別途確認
3. 高体連関連：各宛先に確認：44件871冊
高体連事務局を通じ、別途確認
4. 岳連、協会：35件2930冊
5. 個人向け(オレンジ分)：339件339冊

案内文書添付の上“送付継続申込書”(期限付き)を送付、返却してもらう。原則打ち切りだが、賛助会員を除いて希望者に有料で送付。3月登山月報から、“原則としてX月月から打ち切り、賛助会員を除いて、送付継続希望者へ有料で送付します”というような内容で掲載を開始し、数ヵ月継続する。案内文書及び、“送付継続申込書”の文面については、前田理事が素案を作成し、全理事に配布して了解を得たうえで、今回の提案内容で実施することとなった。

7. 報 告

報告第1号 月次報告、キャッシュフロー

前日の財務委員会で公表された財務状況(予算管理表、資金状況管理表)の説明を赤尾事務局長が行った。

また、望月理事が、過去の年度末時の正味財産、借入金の変遷を紹介した。2、3月に事業がかさむため、資金が必要となっていて、これを解決するためには正味財産を増やす必要があると補足説明をした。

資金確保を、どのようにするかは、財務委員会と事務局に一任する案が提案され、異議なく承認された。

反対0名、棄権0名、賛成18名

報告第7号 ボルダー日本代表選手選考について

安井理事が、BJCの結果に基づいた最新の候補者の状況を反映した配布資料を紹

介し、当内容が常務理事会で承認された旨報告した。

報告第8号 岩手山プロジェクトについて

小田部理事が、画面で岩手山プロジェクト事業計画を説明した。

当事業実施について常務理事会で承認された旨報告した。

8. その他

1. 蛭田会長からの報告

a. JMSCAフレンドの拡張案について

蛭田会長が、組織基盤強化資金の残金(2,931,306円)内で、自然保護委員会用の拡張、昭文社調査費、スキーモHP用の拡張を行うことの提案があり、資金繰り計画上、すでに計上済であることを確認し、異議なく承認された。

b. 4月19日から5月10日まで蛭田会長不在予定。この期間中に、副会長に業務を委任予定。

c. 蛭田会長が登山フェスの提案を説明し、常務理事会で承認された旨報告した。

2. 事務局事務所移転

赤尾事務局長が、移転予定日程を以下のように口頭で説明し、異議なく承認された。

新住所：東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

JAPAN—SPORT—OLYMPIC—SQUARE

移転日程：2月22日(土)

3. JBS(JMSCABusinessSchool)について

赤尾事務局長が、JBSを、2月に募集要項の公開、3月末までに終了予定で、総額1540万円(税込み)の事業で、組織基盤強化事業の一環として実施予定であることを説明し、特に問題なければ開始することを説明した。

以上

令和7年2月13日

記録 赤尾浩一

お知らせ

諸般の事情により登山月報の発行、配布体制を見直します。紙面は発行次第、PDF化したものをHPに掲載しています。今後は印刷物での個人宛発送を原則として取り止め、希望される場合は賛助会員を除き有償といたします。



かすみちゃんのハイキング日記



表紙のこぼ



「鈴鹿山系 鎌ヶ岳」

鈴鹿山系随一の鋭鋒鎌ヶ岳(1161m)を魚眼レンズで覗いてみた。狭い山頂はいつも人で賑わう人気の山だ。もちろん展望もすこぶる良い!見た目のカッコ良さもさることながら、いくつもの登山道は谷道尾根道縦走路とそれぞれに異なる趣があるのも繰り返し通いたくなる所以だろう。春のヤシオツツジに秋の紅葉、冬の樹氷も見応えがある。夏? 鈴鹿のような1000m前後の山では暑すぎてなかなか手ごわいのだが、清流の谷道ならなんとかなる!かな?

(一社)三重県山岳・SC連盟
自然保護委員長 水谷のりや

編集後記

雪山の遭難のニュースで、北海道のある地域では昨年と比較して遭難者が2倍以上に増加しているそうです。その中で気になったのは、遭難者が携帯電話から衛星通信経由でメッセージを送り救助を求めたという記事。調べてみると、iPhone 14以降のモデルでは、携帯電波の圏外でも衛星通信を利用して緊急通報サービスや家族へテキストメッセージを送信できるそうです。なんと便利な機能でしょうか!ただ私のiPhoneは古く対応していないので買い替えが必要。新しいiPhone16は高いので痛い出費です。

(松本光顕)

登山月報 第672号

定価 110円(送料別)
予約年間 1,300円(送料共)
(毎月1回15日発行)
発行日 令和7年3月15日
発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電話 03-5843-1631
FAX 03-5843-1635

[山岳雑誌] 山と人、時代をつなぐ

岳人

4月号

特別
編集

春山 2025

春の三十三名山

モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて販売中!

価格 1,100円(税込)



▶年間購読が断然おトクです!

年間購読
通常特典

購読割引

送料無料

限定品プレゼント

さらに

モンベル
クラブ
会員さまには

モンベルポイント

5,000P プレゼント!

モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、
次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典

岳人オリジナル手ぬぐい



岳人の表紙絵を描く
中村みつを氏のイラストを使用!

限定
デザイン

岳人
カード

全国2,000ヵ所以上で
ご優待!

全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまなご優待が受けられるカードです。



年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組めます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
12, 13, 14, 15	- 再生可能エネルギーの普及支援 - 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング	1, 2, 3, 4, 5, 6	- 健康づくりの支援 - 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応	7, 8, 9, 10, 11	- 次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） - 災害に強いまちづくりの支援

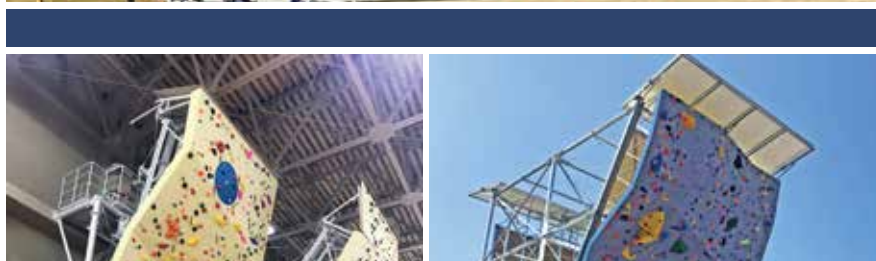
立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



日山協山岳共済会のご案内

**安全登山は登山者の努め、
山岳保険は義務。**

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2023年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
(2024年6月13日)

発生件数	3,126 件 (前年対比 111件増)
遭難者数	3,568 人 (前年対比 62人増)
死者・行方不明者	335 人 (前年対比 8人増)



2025年版

日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.jp)

